

内省の彼方―病む弟と語った後に―

人間が他の動物と違うことの一つに内省があります。人間が動物の部類にいつつ、^{けもの}獣一般から遠ざかる唯一の道は内省にありと言ってもいいと思います。

獣から遠ざかって人間になりたい。

それは私どもの、衷心の願いでなくてはなりません。

人間とはここでは「人格」の異名であります。

人間が人間になること以外に人間に課せられた問題はあります。

『涅槃経』によれば、私どもに向かつて、いとも親切に、唯一の味方の如く詐^{いつわ}つて、私を悪道に誘う者を貪欲だと言つてあります。まことに欲心こそは、怖るべき誘惑者であり、恐るべき敵であります。この恐るべき強敵に対して、我の支配権を与えることは、戦慄に値することであります。しかるに、一生をこの強敵に偽わられて、その奴隷になつて一生を過ぎ、悪道に赴くことは、悲しむべきことであります。生活はまずこの強敵の正体をつきとめることから始められねばなりません。

強い荒々しい馬に引きたてられて、馬に支配されるとすれば、それは恐るべきことでありますが、しかし、そのかわりに、そのたくましい荒馬を乗りこなして使役すれば、仕事が出来ます。欲の煩惱に使われる生活から、煩惱を使役する生活に転ずる。そこに、木号巻頭言の「解脱」への道があります。

しかし、内省こそはかかる解脱への唯一の道であります。

私どもの生活は二つの根源から生れて来ます。二つとは、私どもの内面からと、外面からであります。

私の外から色々な声が私によびかけます。その声に応じて、私の行動をおこします。もちろん我々はこの声を見無視するわけにはゆきません。他人の声、社会の声、国家の声、世界の声、それらは、全て私どもの内面に食い入って、私の生活をよびおこします。これらの一切の声を無視しては、具体的な人生生活はないからであります。

しかし、ここに注意しなくてはならないことがあります。それは、内なる声、魂の叫び、衷心の願いと言ふものを聞くと言うことでもあります。この内なる願いを見無視して生きる生き方は、人間を墮落の底につれてゆきます。

「お前は何故にそんな悪いことをしたか。」

「それは、それをやらないと殺すとおどされたからであります。」

よくこうした人を見ます。この人は、衷心の声を聞いてやらないで、外からの声に盲従したのであります。世には、こうした自己を持たぬ生き方をしている人がはなはだたくさんあります。

人間は、誰も彼も見え坊であります。知らず識らずの間に、安価な賞讃を博したいために、心にもないことをやって、自己を偽ります。七面鳥のように、向こう様次第

で顔色を変え、飾って生きることは、人間の最もはなはだしい墮落であります。そこには真実の意味の生活はなくなっています。

しかし、今一つの墮落があります。それは、心の動くままに何でもやっつてのける生き方であります。腹が立つたらやつつけろ、気に入らなければ喧嘩しろ、欲しかったら奪え、何の遠慮があるか。そうした生き方は、わがまま勝手であり、利己主義であり、厚顔無恥の悪魔主義であります。

そこまで行かなくても、我々がしばしば後悔を感じなくてはならないことがあるのは、飽くことなき、貪欲のまにまに行動した場合であります。これもまた、決して衷心の願いを聞き、深い魂の声を聞いた生活ではありません。

第一が偽善者であれば、第二は悪魔であります。生活そのものが偽善的であり、悪魔的であるならば、それがどんなに学問しようと、富や位が与えられようと、やつぱり、それが拡大されるだけであつて、それによつて一切はますます汚く醜くなつてゆきます。そしてその人もまた、本当の喜びや、満足や、平和を知らないで人生を去つてゆきます。

人間が一番、自分に近くなるのは、苦しみに打ちのめされた時であります。苦しみのない時の生き方は、とても閑のある生き方であります。しかしどんな種類にした所で、苦しみが押し寄せて来ると、考えざるを得なくなりします。

特に周囲の一切の音が、自分をます／＼苦の泥濘でいねいにつれこもうとする時、必死になつて考えつづけます。内なる何ものかによつて救われようとし始めるのであります。

更にそれが深刻なのは、いつまでも生きるつもりでいた者に、「死」が歩みよつて来たと言ふ感じが起きてきた時であります。「死」は人間の一切を打ちくだいてしまふ恐るべき力を持っています。「哲学が何か、科学が何か、芸術が何か、一切が何か。ああ。自分の今日までは、全く無意味であつた。一切の考え方も、生き方も間違つていた！」と悲痛なる自己破産に直面しなくてはなりません。

この死の威力の前に立つて、一切を打ちくだかれた、絶対無の自覚から、一步ふみ出したところに、法身常住なる釈尊の世界があり、南無阿弥陀仏の親鸞聖人の天地があつたのであります。

死の恐怖から後もどりせず、逃げず、ゴマ化さず、自暴自棄に陥らず、百尺竿頭一步を進めた時、死地に活路が打開されて、そこに、金剛不壊の大信海が廻向せられるのであります。

死その他、深い苦しみが押し寄せると、必ず「人生は不可解」になつて来ます。しかし「不可解」のままでは、とどまつていられません。不可解だと叫んでいる魂は、もつと／＼深い本当のものをつかみたい、解決が得たいと願っています。その衷心の願いを聞くべきであります。それは深く／＼内省の彼方にうなつている声であります。

喉が乾いた時には水しか引き受けず、餓えた時には食物より外には求めないが如く、掘り下げられた心の程度より以外には「教え」も受けつけません。

一切からつきとばされて死の張とばりの前にはたたずむ時、一切から棄てられて、罪悪煩悩の泥濘でいねいの中に沈没しようとする時、そして、それより外、一切の行く道がない時、久遠劫来招喚したもう如来の声が聞えて来ます。

如来は罪悪煩悩に向かつて無碍光であり、生死無常に対して無量寿であります。

内省は、思惟であり、はからいであり、如来は人間の思惟の彼岸であります。しかし、内省思惟を通さないでは如来のみ胸には帰られません。しかし如来は人間の思惟の領域ではありません。不可解でなくて、不可称、不可説、不可思議であります。

如来を信ずれば、清浄な心になれるとは、誰でもが予想することであり、しかし事実、その真反対であります。如来の智慧光によつて照破される時、そこにあらわれる相は、「罪悪生死の凡夫」であり、八万四千の煩惱であり、群賊であり、悪魔であり、火の河であり、水の河であつて、そこには一塵の善も、一毫の真実も見出せません。賢者は愚者に、善人は悪人へと転落します。しかもその窮極において、如来の本願は、人格の全てに直入し、顕現して、人になりきります。悪人そのまま救われる体験がおきて来ます。

普通は、人格は、善になりきることによつて成就すると考えられます。

しかし、人格は自覚によつてのみ成立します。ありのままの自己を凝視し、ありのままの自己を知るところにのみ人格はあります。したがつて、愚への、悪への徹底こそ、人格成立の根本条件であります。

しかし、それは愚や、悪が人格の成立の根本条件であると言ふのではなくて、清浄真実なる如来の本願、やがて、金剛の自信心こそ、人格の本質だと言ふのであります。愚に徹しなければ、賢愚を超えることが出来ず、悪に徹しなければ、善悪を超えることが出来ません。賢愚、善悪を超えなければ、如来の本願に乗托することは出来ません。

内省必ずしも信仰ではありません。しかし信仰には必ず自覚内省をともしません。否、如来によらねば、自覚内省すら全きを得ることは出来ません。混乱に陥つた自己を救う道は、教えを聞きつつ、深い内省へと沈潜しずみはてするより外あり得ません。

外物を追うてのみゆく生活には真の満足はあり得ません。内に内にと求めてゆく時、そこに満足があり、平和があり、安らぎがあります。

現代の通弊は、一切を外に求めて行くことに疲れて、内への生活、内に人間を成就することを軽んじ、むしろそれを軽蔑しようときえします。そうした傾向は、政治家にも、教育者にも、芸術にも、社会全般にみなぎつております。

我等は、人間成就の世界をとりかえさなくてはなりません。

如来も浄土もすべては、人間成就の内面的な世界に必然の關係を持つ所にのみ、宗教があります。真実の宗教的本尊は、いつも自覚内省をよびおこし、自覚を通して、人格の本質に貫流して、大生命となります。

内省の言葉は古い、しかし、常に新らしい意味と生活を、我等に与える永久に新しい言葉であります。

内省なき一日は空虚であり、内省なき一生は無意味であります。